

## 第2章 ユダヤ教はいかにして 組織制度偏重に陥ったか（4）

（続き）

このように、イエスの生きられた当時、人々の信仰生活は形式的で律法主義的な伝統至上の在り方に捉えられていたのである。モーセの律法が文言云々で扱われ、これに数多の伝統が加わってそれらが過度に強調された結果、単に形式的にどうか信仰表現の問題となっていた。外面的しきたりや儀式のそれが負いえぬほどの重荷となり、それによって内なる活力が押し潰され、信仰の精神的・靈的要素が表面的なものにされた。狭く形式的な殻で外側を覆われた、権威主義的で律法主義的な制度体制となっていたのだった。

翻<sup>ひるがえ</sup>って、今日<sup>こんにち</sup>我々は聖書を読み、イエスがそこで律法学者やファリサイ派の人々を厳しく非難されるのを見ている。また、当時のユダヤ人の信仰が的外れで、神の真理からどれほど離れていたか、その事実を教会で学んでいる。そして、外なる形式は追うものの、その精神の失われた上辺の信仰がいかに底の浅い<sup>まがもの</sup>物か、共に議論を交わしている。こうして、我々は彼らユダヤ人の信仰を完膚なきまでに非難するが、そのあまり、それは企<sup>たくら</sup>みある悪意の人々の謀<sup>はかりごと</sup>によって生じた、との印象を持つかもしれない。が、それは正しくない。彼らは神に熱心な人たちだったからである。神への熱い思いを抱<sup>いだ</sup>いていた。ユダヤの宗教指導者たちは、歴史を通してずっと、人々のために解き明かしてきたのだ。人生はいかに生きるべきか、と。その信ずるところは神の律法に基づいていた。人々はこうして、異教と偶像崇拜のただ中、それらに取り巻かれながらも、唯一の神への信仰を堅持してきたのだった。

しかしながら、〔たとえそうであっても、その結果に変わりはない〕。ここまで、そこで何が起り、それがいかに生じたのか、手を尽くしてそれらの理解が図られた。動機が考察吟味され、その多くが〔悪意からでないことが分かって〕無実の罪も晴らされた。そして、人間の至らなさ<sup>しん</sup>と無知にしかるべき酌量<sup>しゃくりょう</sup>が加えられもした。かくして、すべての説明が尽くし終えられた。〔しかし〕それでもやはり、結果は同じで変わらない。我々の有りようをあるがままに見られる神の目からするとき、彼らの宗教は組織制度偏重に陥っていたと言わざるをえない。ここに、組織制度偏重に潜む<sup>しん</sup>真の危険性の一つがある。すなわち、渦中の人々は、それが彼らのその所で起こっていることに真実気づくことがない、ということである。それどころか、そんなことはない、と固く信じているのが実情である。運動における変化というのは極めて徐々に生じるもので、それらは感知しがたいからである。教会も、それが組織制度偏重に陥っていても、事が成功裏に進んでいるときは教会員の目が塞<sup>ふさ</sup>がれ、その問題点が見えなくなる。そこにいる人たちは実際、他に何も知ることなくきたため、今ある有りようがそのまま本来あるべき信仰のそれと思いがちである。こうして、信仰が組織制度偏重に陥るも、人々はそれを知らずにいるようになる。

## 注

1. Quoted in Edith Hamilton, "History's Great Challenge to Our Civilization," *Reader's Digest* (March, 1959): 160.
2. これは、循環的な歴史観の提唱と理解すべきものではない。聖書の歴史観は、循環的というより、むしろ直線的である。聖書の神は歴史において、御自身のゴールへと その歩を進められる。ここで言わんとしているのはただ、次のようなことである。すなわち、その活動を組織化して行なうとき、信仰の運動ととも、活力溢れる生き生きとした時期から、続く諸段階を経て、ついにはいのちのない形式主義のそれへと移行する趨勢がある、ということである。
3. Meyer Waxman, *A History of Jewish Literature from the Close of the Bible to Our Own Days* (New York: Bloch Publishing Co., Inc., 1930) I: 45.
4. H. Graetz, *History of the Jews* (Philadelphia: The Jewish Publication Society of America, 1891) 337.
5. Emil Schürer, *A History of the Jewish People in the Time of Jesus Christ* (Edinburgh: T. & T. Clark, n.d.) II. II. 54.
6. Herbert Danby (ed. and trans.) *The Mishnah*. (Fairlawn NJ: Oxford University Press, 1933), Aboth 1:1, 446.
7. Ibid., Sanhedrin 11:3, 400.
8. A. T. Robertson, *The Pharisees and Jesus* (New York: Charles Scribner's Sons, 1920) 114.

## 訳注

- (1) [ ] 書きは、訳者の補筆挿入。
- (2) スペイン生まれの アメリカの哲学者、批評家、詩人。1863～1952 年。元・ハーバード大学教授。批判的実在論の代表者として活躍した。後半生は、アメリカを離れ、ヨーロッパで活動。
- (3) ユダヤ人の歴史家で、ユダヤ史をユダヤ的視点から包括的に著した最初の学者の一人。1817～1891 年。19 世紀ドイツにおけるユダヤ学の代表的学者として活躍した。
- (4) ドイツのプロテスタント聖書学者。1844～1910 年。ライプツィヒ大学、ゲッティンゲン大学等の教授を歴任。とりわけイエス時代のユダヤ民族史に通じ、その精緻な研究で知られた。
- (5) 口伝律法の集成「タルムード」の第一部で、本文部分。註 釈のゲマラが第二部を構成。
- (6) 聖書の訳文は口語訳から。原著が意図して ASV (American Standard Version) の英訳を用いており、邦訳聖書では新共同訳より口語訳のそれに近い。
- (7) 古代ユダヤを統治したハスモン朝の祭司王。紀元前 135～105 年在位。版図の拡張によって知られ、当初、ファリサイ派と協調した。
- (8) 原文は "come ye out from among them, and be ye separate." だが、出典不記載。旧約聖書からの引用とみられる II コリント 6:17 の一節と考えられ、AKJV (Authorized King James

Version) の英文にほぼ一致。ただし、旧約における完全な一致箇所は不明。本訳文では、AKJV に合わせ、文語訳を当てた。ちなみに、口語訳では「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ」と、原著原文により近い表現になっている。いずれにせよ、旧約時代の一節と考えられるこの命令に フェリサイ派の人々は従い、自らを分離された者たちとした、というのが本文の主旨である。

(9) "go the second mile" は、マタイ 5:41 からの転用表現。邦訳聖書では、「(もし、だれかが、あなたをしいて一マイル行かせようとするなら、その人と共に) 二マイル行きなさい」と訳出されている(口語訳。新共同訳では、「だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい」)。つまり、「求められるところを超えて 事を行なう」ことであり、ここではすなわち、「規定以上に 事を行なう」ことを意味している。

(10) マタイ 5:21~22 他。邦訳は口語訳聖書より。原著が意図して AKJV (Authorised King James Version) の英文を用いており、邦訳聖書では新共同訳より口語訳のそれに近いため。

(11) アメリカ 南部バプテストの新約聖書学者。1863~1934 年。生涯、サザンバプテスト神学校で神学教育に携わった。多くの著書を著わし、とりわけギリシア語に精通。今なお、基本文献とされているものも少なくない。

(矢野 眞実訳)